

## 「旧約の信仰者たちの手本」 預言者エレミヤ② (11:35~39)

女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。

またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした— 荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

(11:35~39)

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と 11 章の内容

- (1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の中でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

## 2. 前回までの流れ

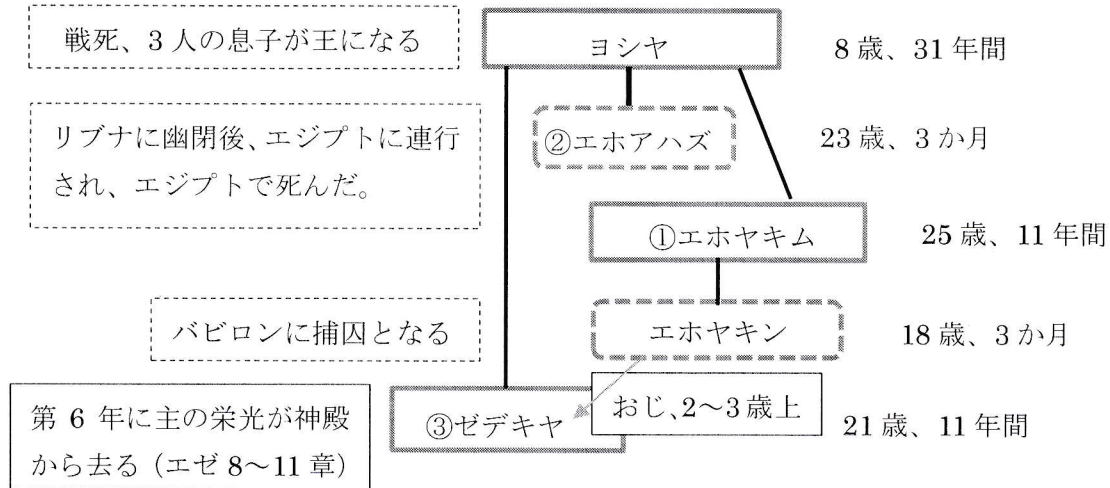
- (1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。
- (2) 南王国の歴史を概観し、分裂後の王を 4 代ずつ 4 期に分けて概観した。最後の第 4 期は計 7 人の王が立ったが、世代としては実質的に 4 代であった。
- (3) 南王国の合計 19 人の王の中で、明確に信仰を持ったことがわかるのは、第 1 期ではアサとヨシャパテ、第 3 期ではヒゼキヤ、第 4 期ではマナセとヨシヤであった。彼ら 5 人から、それぞれ信仰の手本を学んだ。
- (4) 第 3 期において 54 年間にわたり活動した預言者＝イザヤ
  - ① イザヤは、預言者としての召命を受けたときに、あらかじめ次のように主から語られていた。イザヤの伝える預言を聞いても民は悟らず、預言の成就を見ても目を堅く閉ざすであろう (イザヤ 6:8~10)。
  - ② 人間的な目から見れば、報われることのない 54 年間である。「のこぎりで引かれ」とは、第 4 期に入ってすぐ、マナセ王によってイザヤが殺されたことを指す (聖書に記載なし、ユダヤの伝承)。
  - ③ イザヤの信仰の手本とは、まさに忍耐である。
- (5) 本日は、最後の王ゼデキヤと第 4 期に 41 年間活動した預言者、エレミヤである。

□マタヌヤ→ゼデキヤ (21歳、11年間) BC597 (21歳) ~586 II列 24:17~20

1. 24:17 エホヤキンのおじ=父エホヤキムの兄弟=ヨシヤの子。BC618生まれ

(1) ヨシヤ 30歳の時の子。「エホヤキンのおじ」とはいえ、エホヤキンと年齢近い。

- □マタナ=賜物、□マタヌヤ=主の賜物。□ゼデキヤ=主は正義である



2. 24:19 彼は、すべてエホヤキムがしたように、主の目の前に悪を行った。

3. 24:20 その後、ゼデキヤはバビロンの王に反逆した。

4. 25:1~12

(1) 治世第9年、エルサレムが包囲される

(2) 治世第11年、エルサレム陥落 → 第3回捕囚 紀元前586年

5. エレ52:30 第4回捕囚

6. II歴36:12~16 エルサレムが陥落した原因

ゼデキヤについて

(1) 彼は、その神、主の目の前に悪を行い、主のことばを告げた預言者エレミヤの前にへりくだらなかつた。

(2) 彼はまた、ネブカデネザルが、彼に、神にかけて誓わせたにもかかわらず、この王に反逆した。

(3) このように、彼はうなじのこわい者となり、心を閉ざして、イスラエルの神、主に立ち返らなかつた。

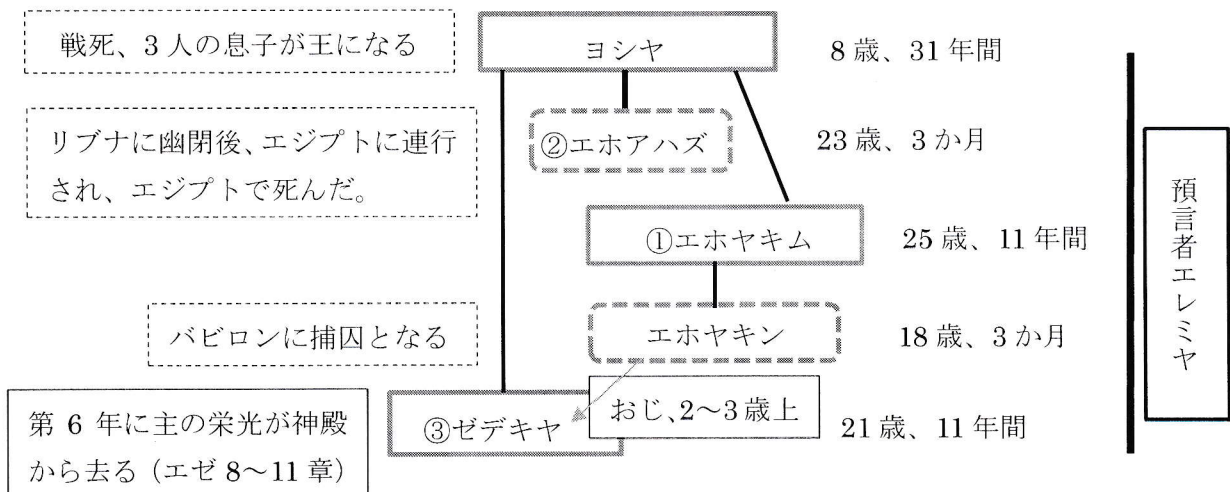
民について

(4) 祭司長全員と民も、異邦の民の、忌みきらうべきすべてのならわしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した。

(5) 彼らの父祖の神、主は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。

(6) ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることのないまでになった。

□預言者エレミヤ ヨシヤの第13年からゼデキヤの第11年まで BC627~586



1. エレミヤが預言者として活動した期間 エレ1:1~3

- (1) 1節 ベニヤミンの地アナトテにいた祭司のひとり
- (2) 2節 預言の開始は、ヨシヤ王の第13年。このときヨシヤ王は20歳。おそらく、エレミヤも同じくらいの年齢であろう。1:6「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません」
- (3) 3節 預言の終了は、ゼデキヤ王の第11年の終わりまで、その年の第5の月まで。
  - ① 第5の月の7日に、エルサレム陥落 (Ⅱ列25:8)
  - ② 「エルサレムの民の捕囚の時」：このときのバビロン捕囚 (第3回目) を指す
- (4) エレミヤは結婚しなかった：主から「あなたは妻をめとるな。またこの所で、息子や娘を持つな」と命じられた (エレ16:1~4)
- (5) エルサレム陥落後も、エレミヤは主のことばを受けて預言した。
  - ① ユダの民の一部は、バビロンに強制移住されずに残置された。バビロニヤは、残留の民の総督としてゲダルヤを立てた (Ⅱ列25:22~24)。
  - ② 第7の月に、王族のひとりイシュマエルが10人の部下とともに蜂起して、総督ゲダルヤといっしょにいたユダ人とカルデヤ人 (=バビロニヤ人) を殺害した (Ⅱ列25:25)
  - ③ イシュマエルはアモン人の地へ逃亡。残留の民は、カルデヤ人の報復を恐れて、エジプトへ逃れた (Ⅱ列25:26、エレミヤ41:15~18)
  - ④ エジプトに向かおうとしたとき、残留の民は、エレミヤに同行を頼み、エレミヤから告げられる主のことばに従うと誓った (エレ42:1~6)。エレミヤは10日の後、「バビロンの王を恐れることなく、この国にとどまりなさい。」と預言した (エレ41:7~22)。しかし、民は聞き従わず、エレミヤも連れてエジプトに向かい、タフパヌヘスに着いた (エレ43:1~7)。
  - ⑤ タフパヌヘスにはパロ (エジプト王の称号) の宮殿があった。そこで、エレミ

ヤに主のことばがあった。「バビロンの王ネブカデレザルが来て、エジプトの国をつぶす」(エレ 43:8~13) 注:ネブカデレザル=ネブカデネザル(列 24:1)

- ⑥ エジプトは、亡命してきたユダヤ人たちを受け入れた。彼らはミグドル、タフパヌヘス、ノフ、およびパテロス地方に住んだ(エレ 44:1)。
- ⑦ エジプトの国に寄留する民たちに向けて、エレミヤに主からのことばがあった(エレ 44:2~30、46:13~28)。「エジプトの国にいるすべてのユダヤ人は、剣とききんによって、ついには滅び絶える。剣をのがれる少数の者だけが、エジプトの国からユダの国に帰る」(エレ 44:27~28)。
- ⑧ エレミヤのその後は、聖書に記録なし。エジプトの地で死んだものと推定される。

## 2. エレミヤが預言者として語ったために受けた仕打ち

- (1) 出身地アナトテの人々からは、預言をやめないと殺すと脅された: エレミヤの命をねらい、「主の名によって預言するな。さもないと、われわれの手にかかっておまえは死ぬ」(エレ 11:21)
- (2) 公衆の往来するところで足かせにつながれた: 祭司パシュフルは、エレミヤを打ち、主の宮にある、上(かみ)のベニヤミンの門にある、足かせにつないだ(エレ 20:1~2)。→ エレミヤの苦悩(20:7~18)
- (3) 裁判にかけられ、あやうく死刑になりかけた: エホヤキム王の治世の初め(元年とは限らず、時期的に初めの頃。他の箇所 28:1 では第4年を指す例あり)、祭司と預言者と民たちが、エレミヤを死刑にしようと訴えた。首長たちや長老たちが死刑に反対して、エレミヤは釈放された。(エレ 26:1~24)
- (4) 預言を口述筆記した巻き物を、王によって焼かれた: エホヤキム王の第4年、エレミヤは口述によって巻き物に主のことばを書き記し、バルクに主の宮で読ませた。その後、巻き物は王のもとに届けられ、王と首長たちの前で読み聞かせられた。王は、読み手が3~4段読むごとに、書記の小刀でそれを裂いては、暖炉の火で焼き尽くした(エレ 36:1~32)。
- (5) 地下牢に入れられた: ゼデキヤ王がバビロンに反逆したので、バビロニア軍がエルサレムを包囲したが、エジプト軍の動きを見て、いったん退却。このとき、エレミヤがエルサレムを出てベニヤミンの地に行こうとすると、バビロニアへ逃亡すると疑われ逮捕され、丸天井の地下牢に長い間入れられた。ゼデキヤ王は、エレミヤの命を助けるために、監視の庭へ移送した(エレ 37:1~21)。
- (6) バビロニア軍はゼデキヤの治世第9年に再び来て、エルサレムを包囲した(エレ 39:1)。エレミヤは治世第10年の時点で監視の庭に監禁状態であった(エレ 32:1~2)。
- (7) 監視の庭にある「王子マルキヤの穴」に投げ込まれた: パシュフルの子ゲダルヤたちは、監視の庭にある「王子マルキヤの穴」にエレミヤを投げ込んだ。クシュ人

の宦官エベデ・メレクはエレミヤを助けるために、王に告げ、エレミヤを穴から引き上げた(エレ38:1~13)。→ゼデキヤとエレミヤとのやり取り(エレ38:14~28)。

(8) エルサレム陥落まで監視の庭に監禁されていた(エレ38:28)

□エレミヤの預言の中から、本日は2つ

1. 70年の預言(エレ25:1~14, 29:10)

- (1) 1節 エホヤキム王の第4年=BC605 第1回捕囚の年
- (2) 11節 バビロンの王に70年仕える
- (3) 12節 70年の終わりに、カルデア人の地を、彼らの咎のゆえに罰する
- (4) 29:10 バビロンに70年の満ちるころ、あなたがたをこの所に帰らせる
- (5) ダニ9:1~20 ダニエルの祈り
  - ① 9:1 初代ダリヨス王の治世元年=BC539
  - ② 9:2 エレミヤの70年の預言を知る
  - ③ 9:19 遅らせないでください:70年の起点を第1回捕囚の年とする願い

(6) II歴36:20~23

- ① ペルシヤの王クロスの第一年=BC538
- ② クロス王については、イザヤの預言 イザヤ44:28~45:13
- ③ イザヤの死はBC686と推定される。クロス登場はそれから約150年後。

(7) エズラ記

- ① 1:1~3 ペルシヤの王クロスの第一年=BC538
- ② 2:70 イスラエル人は、自分たちのもとの町々に住みついた=BC537
- ③ 3:1 第七の月が近づくと、民はいつせいにエルサレムに集まってきた
- ④ 3:6 第七の月の第1日から全焼のいけにえを主にささげ始めた
- ⑤ 3:8~10 翌年の第二月に、神殿の礎を据えた=BC536
- ⑥ 6:14~15 宮はダリヨス王の治世第6年に完成した=BC517(第一神殿崩壊BC586から70年)

七十年

2. 新しい契約の預言(エレ30~31章):見よ、その日(複数形)が来る

(1) 30:3 全体的な結末をまず述べる

- ① 30:4~7 大患難時代
- ② 30:8~9 メシアの王国
- ③ 30:10~17 だから、今は恐れるな
- ④ 30:18~31:25 離散の地からの信仰ある帰還

ここで、私は目ざめて、見渡した。私の眠りはこちよかった。(31:26)

(2) 31:27~30 土地の約束が成就する

(3) 31:31~37 新しい契約=神の律法がイスラエル民族の心に書き記される。彼らは、「小さい者から大きい者まで」=子どもから大人まで、全員が信者となる。

(4) 31:38~40 エルサレムは建て直される